会員だより

畔豆のある韓国の農村風景

富山県農村医学研究会　大浦　栄次

80年代の後半から始まった円高の影響で，日本人の海外旅行者が急増している。

我が，散居村の片田舎のわずか30戸余りの村の営農組合。その役員の慰安旅行にも海外旅行として韓国が選ばれた。最初は10名近く参加する予定であったが，すでに韓国旅行を経験した者やそれぞれの都合で，結局参加者は私を含め３名となった。

平成２年８月，名古屋空港を発ち，ソウル空港へ。わずか２泊３日ではあったが，２日目に他の二人とは分かれ，通訳の鄭敬植さんの案内で韓国の農村を駆け巡る機会をえた。

日本の原風景、韓国の農村の風と光

旅程２日目の８月20日。ソウルから北西へ約7～80kmに位置するカンファードまでを往復し，農村を垣間見た。

カンファードは日本名「紅華島」と呼ばれ，朝鮮戦争以後は，朝鮮民主主義人民共和国に対する最前線の一角を成す。また，1875年，明治８年にはいわゆる日本が朝鮮半島，そして大陸侵略の足掛かりとなった「紅華島事件」の舞台ともなった所でもある。

ソウル郊外に出ると，そこは田園風景である。見渡す限りきちんと区画整理された水田に出穂直前の稲が，風に揺れている。その色，渡る風が懐しい。韓国旅行者である事を忘れ，一時目を閉じ，そして再び目を開けるとそこは，日本のどこか知らない土地に立っている錯覚を覚える。

稲の品種は，韓国で選抜された，「統一米」「秋晴」など，早稲品種が主流を占めている。収量は，籾にして約600～800kgぐらいとのことである。区画整理は，約20年前から始まったセマウル運動（新農村運動）により行われたものである。

驚いたことに，水田を区画する畔に豆が植えてある。鄭さんに，何時頃からこの畔豆を植えるようになったか，と聞いてもよく分からないと言う。日本では，ほとんど見られなくなったが，韓国の畔と言う畔に豆が植えてある。この畔に豆を植える栽培法は，一体どこで，いつ頃から始まったのであろう。

図１　畔に豆が植えてある。

江戸時代の中期の1700年代初頭，土屋又三郎という金沢藩の十村が、一年の農村風景と農作業を絵図で現した「農業図絵」を残している。これには，畔に豆ではなく，稗を植えている図がある。大豆は別に畑に植えている。

このように豆ではないが，畔を利用して何かを植えるという栽培法は，少なくとも江戸時代には一般化していたと考えられる。が，何時の時代から始まったかは，分からない。

遠い昔，稲作が日本に伝播したとき一緒に大陸を経由し，畔に何かを植える栽培法が伝

わったのだろうか。畔豆のある韓国の農村風景に，日本文化の源流を見る思いがした。

中古の農業機械

ある一軒の農家にお邪魔した。その家は，昨年まで村の家々の農作業を請け負っていたという。しかし，コンバインが壊れ，また，若い者が都会に働きに行ってしまったので，今年からは止めたという。

格納庫を覗くと，6条植え搭乗型田植機が，手入れのされないまま放置してある。また，コンバインはガタガタに壊れたような状態であった。なお，韓国製といわれる耕うん機などは，ベルトがむき出しになっており，農業機械の安全に対しての考え方が，まだ十分徹底していないように思えた。（図2，3）

ところで，我が家の4条植えの歩行型田植機と比較すると，搭乗型の田植機を使用している点では韓国の農村は、確かに進んでいるように見える。が，整備をする意欲から見放された機械を見ていると，韓国農村の苦汁が滲んでいるような気がした。

図2　壊れたコンバイン

図3　むき出しのベルトの耕運機

今，韓国の農村人口は今急速に減少し，過疎化が進み，一方，逆に都市では人口集中が進み，いわゆる「都市問題」が吹き出ている。ちなみに，ソウルの人口は，1970年には，553万人，80年には，800万人を越え，現在では1000万都市に肥大し全人口の5分の1を占めている。

さらに，いま進んでいるガットのウルグアイラウンド交渉は，韓国の農村の将来に暗い影を投げかけているという。

農薬の表示

韓国の農村を駆け巡る動機の一つは，農薬の袋の表示を確認する事であった。

1985年，第9回国際農村医学会がニュージーランドのクライストチャーチにおいて開催されたおり，2泊3日のファームスティ（農家に滞在しニュージーランドの農業の現状を理解してもらう制度）を行った。その時，滞在した農家で農薬の袋を見せてもらいショックを受けた。農薬の袋の表示で，真っ先に目に飛び込んできたのは，「POISON」，つまり，「毒」という文字であった。肝心の農薬名であるLindenという文字は，POISONの半分の大きさにも満たない。日本の農薬の表示を見慣れた私にとって，この事実は新鮮な驚きであった。

日本の，農薬の袋の表示は，農薬名は最も大きく，「毒物」とか「劇物」との表示は極めて小さく書かれ，極端に言うと，お年寄りには気が付かない程度に小さく書かれている。農薬を「毒」と認識する事は，諸々の農薬問題解決の最も基本と思う。最低，農薬の袋に大きく「毒物」との表示を，と願うのは私だけであろうか。

農薬の安全使用より、生産第一

それ以来，チャンスがあれば各国の農薬の袋の表示を見聞したいと思っていた。今回の韓国旅行の最大の目的は，この農薬の袋の表示を確認することであった。

カンファードに行く途中，露店の市場が並ぶ町中の通りを散策することになった。近郷近在から多くのおばさん達が，思い思いの位置に畑で取れた野菜などを並べている。

日本の野菜のように，見てくれは大きく格好いいものは少ないが，スリムでおいしそうなものが豊富にある。（図４）

図4　品数豊富な露天

通りを歩いていて，偶然に農薬販売店にいきあたった。間口２間，奥行き３間ほどの小さな店である。表示はすべてハングル語で，全く読めない。通訳の鄭さんも農薬の袋の表示の発音は出来ても，農薬に関する知識がないようで，どんな農薬かあまり分からないという。ただ，店の人にパラコート系の農薬と教えてもらった農薬の瓶には，毒物の表示がないと言う。（図５）

今，韓国では生産第一で，安全は二の次ぎの風潮があり，農薬の表示もよっぽどのものでない限り，「危険だ」との表示はしない傾向にある，とのことであった。日本の農薬中毒対策の現状に，決して満足できるわけではないが，かつて，日本が生産第一主義をがむしゃらに押し進めてきた道を，今また韓国が歩もうとしている現実に，なんとも言えぬ胸の痛みを感じた。

図5　農薬の表示

ヤナギ花粉症？

ソウル市街には，多くの柳並木が見える。この柳が春になり一斉に咲くと，花が空中を舞い飛んで人々を襲い，多くの人が喘息のような症状に悩むと言う。韓国の医学界ではどの様な判断をしているのかは分からないが，ひょっとしたら，「ヤナギ花粉症ではなかろうか」，と疑った。ただ，鄭さんの話では，韓国ではニンニクを多く食べるので，アレルギー症状は余りひどくならないと言う学者もあるそうである。

なお，日本では杉花粉症に大変悩まされているわけだが，韓国には，杉の木はない。

ドングリのコンニャク

北朝鮮が見えるカンファードの城門外で，小休止をとった。そこには，60～70才と思える老夫婦が，露店で食事を出していた。鄭さんの勧めで，ドングリを晒して，澱粉を取り出し固めたと言うコンニャクのようなものを食した。このドングリのコンニャク？，が最近韓国人には大変持て囃されているのだそう

である。

韓国では，開発国の例に漏れず，公害問題が表面化してきており，重金属による被害も出てきている。これに対して，最近，ソウル大学の大変有名な先生が,「ドングリは重金属を吸着し，無毒化する」と発表し，その後ドングリのコンニャクは大変な人気になったと言うのである。

私も，以前，ラットを使って重金属の吸収に関する実験をおこなっていた際，大豆蛋白を重金属に混合した餌では，重金属の腸管吸収が抑えられることを経験している。ドングリにもそのような働きがあるのであろうか。

ただ，カンファードで食したドングリのコンニャクは，韓国旅行中，最も辛く目の玉が飛び出るほどのトウガラシが入っていた。しかし，通訳の鄭さん初め，そこにいた韓国の人達は平気で美味しそうに食べていた。(図6)

図6 ドングリのコンニャク

お わ り に

今回の旅行は，本当に駆け足だったので，全く不十分な，知識を，断片的にしか耳にする事が出来なかった。ただ，どこに行っても，ソウルオリンピック後の韓国経済は，未曾有のインフレに見舞われ，金，金の社会が以前より強まったという。我々が韓国を訪れたのは，オリンピック後2年してからであるが，ある人は，オリンピック後の物価上昇は8割りと言い，ある人は，もう2倍以上という。

また，日本と同様，ガットのウルグアイラウンド交渉では，オレンジ，タバコ，米の輸入自由化が迫られている。

農村における医療保障も，十分ではなく，ようやく制度的に準備され始めたところだという。

いずれにしても，韓国経済は，益々厳しさを増しているようであった。日本の支配を長く受け，また，朝鮮動乱で南北が分断された民族が，一日も早い平和的統一を達成することを願わずにはいられない。